（別紙）

大雪の被害に対する果樹、花き類の技術対策について

令和７年（2025 年）２月 10 日

農業技術課

１　ハウス共通

（１）施設が変形または倒壊しかかっている場合は、人的被害に十分注意しながら、施設内に支柱を立てて補強するとともに被覆資材を補修する。パイプが歪んでいると、今後の少しの降雪で被害が拡大しやすいので、こまめな雪落としや支柱の追加、十分な加温により被害防止を図る。

（２）これまでに被害が見られていない場合でも、今後の降雪で被害が発生する恐れがあるので、支柱などを多く設置して施設の補強を図る。

（３）部分的に破損している場合には、内張りカーテンや仕切りなどを行うことにより、農作物の生育に支障が起きない最低温度を確保して、早急に復旧を図る。

２　ぶどう

（１）棚の修復

・棚が倒壊し樹体が倒伏したものは、消雪剤を散布し融雪を促す。修復作業が可能となったら早めに起こす。

・園の１辺から支柱を棚の親線や主枝など骨格枝に立てていき、棚面を持ち上げる。人手の多い方がスムーズに進むので、できるだけグループ作業とする。

・樹体の修復など一連の作業が終了したら、棚の補修をきちんと行う。また、今後の対策として、下支えの支柱を強化しておく。

（２）樹体の修復

・主幹が裂けた場合には、棚を起こし支柱で下支えした後、ボルトやかすがいなどで止め、接合後に塗布剤で傷口を覆う（図１）。縄を幅広く巻き締めるなどして固定してもよい。

・固定できたら、傷口から水が入らないようシルバー系のビニール類で覆う。シルバー系のビニールがない場合は紙の肥料袋などを使い、透明ビニール等の被覆部の温度が上がる資材は使用しない。

・融雪後に修復処理する場合には、樹体が裂けた部分は乾燥防止のため、コモなどをかけておくことが望ましい。

・樹が大きく裂け、通導組織がわずかしかつながっていない場合は、被害が大きい側を切除し、傷口に塗布剤を処理する（図２）。空いた場所には枝振り、苗木植え付けなどを行い棚面を埋めて生産回復を図る。

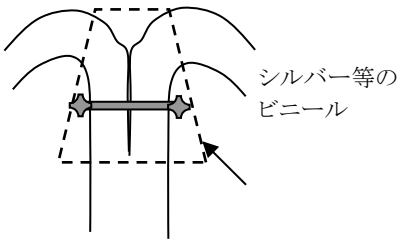

図１　通導組織がつながっている場合

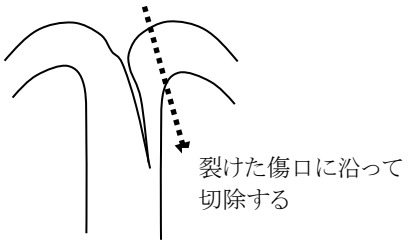

図２　通導組織がつながっていない場

３　シャクヤク

・加温機が稼働できる場合は、引き続き加温を行って凍害を回避する。加温機が稼働できない場合、もしくは設置されていない場合は、不織布や保温マット等により保温に努め、凍害を回避する。

・シャクヤクの加温栽培で、萌芽前の場合には株への影響が少ないと思われる。ハウスの修復が可能であれば、すみやかに修復して加温を再開する。修復できない場合は、資材等を撤去して露地栽培に切り替える。

・シャクヤクは比較的低温で萌芽し生長するが、萌芽直後の草丈が短いステージのものは、ベッドにワラ、モミガラ等の保温資材を被覆し芽の凍結を防止する。

・草丈が伸びているものは、この春の切り花は難しいので、次年度以降の切花に向けた株養成を行う。